

夕方の渋谷百軒店

シブヤ ヒヤツケンダナ

むせぶやうなトランペットを聞きながら

この街とも長いつきあひだなと考へた

入り口から三十メートルはつまさきあがりのだらだら坂

南北三本東西二本の幾何学的な街路にすぎない

思ひ出の中では迷路めいた妖気がただよつてゐる

昭和初年小学生だつた僕はそこで鯨を見た

中央通りに見世物小屋があつて

波間に勇ましく泳いでゐる鯨の大看板が出てゐた

入場料五銭をはらつて入ると

板の台の上に二メートル位の乾燥した鯨が置いてあるだけだつた

仕方ないから突つ立つた尾にさはつて帰つた

「この子の手袋はどうしてこんなになつてもなまぐさいんだらう」

母が言つてゐた

僕は知らん顔をしてゐた

芝居小屋もあつた

一人の僧が悩みに悩んで瀧つぽに身を投げる

岩石のあひだに落ちた時

「あ あ さうなんだ ドーゲン 只今 さとりました」

道玄だか道元だつたのかはわからない

ジャズといふものは意識をいろいろの層に分けてゆらせる

外套のポケットの中で僕の五指が妙な動作をしてゐた

女のからだをまさぐつてゐる

手のひらが濡れてゐるのにも気がついた

存在しないのに明確に在るものをもてあそんだ

ああ シブヤ ヒヤツケンダナ

燈火のにぎやかな道玄坂を下り渋谷駅の方へ歩いて行つた

「あなたの手はどうしてへんなにほひがするのでせう」

さう言つてとがめられることもあるまい